地域子育て支援センター事業の検討

——「親子教室」の調査から——

白幡　久美子（乳幼児教育）

1. はじめに

1994年12月16日に、厚生・文部・労働・建設4大臣の合意により「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）が策定された。これは少子化が社会問題になっている中で、子育て支援に社会全体で取り組み、総合的・計画的に推進するためのものだった。

この施策の基本的視点は以下の3点である。

① 安心して子どもを生み育てることができる環境づくり
② 家庭における子育てを基本とした「子育て支援社会」づくり
③ 子育て支援策における「子どもの利益」の尊重

とくに、エンゼルプランの具体化として、女性の社会進出の増加に伴う保育需要の多様化等に対応するため、当面緊急に整備すべき保育対策等について、1994年12月18日大蔵・厚生・自治の3大臣合意により、「当面の緊急保育対策等を推進するための基本的考え方」(緊急保育対策等5か年事業）が策定された。

これらエンゼルプラン、緊急保育対策5か年事業の策定に基づき、保育所における特別保育事業が推進されてきた。さらに1998年の児童福祉法改正に伴い、厚生省は「特別保育事業実施要綱」を定め、以下のように特別保育事業について定義[(1)]している。

〈特別保育事業の定義〉

1　延長保育等促進基盤整備事業
2　産休・産休明け入所予約モデル事業
3　低年齢児保育促進事業及び開所時間延長促進事業
4　地域子育て支援センター事業
5　保育所地域活動事業
6　障害児保育対策事業
7　家庭支援推進保育事業

この特別保育事業の推進[(2)]は、本年1999年度を最終年度とすることになる。とくに、低年齢児保育や延長保育等の多様な保育サービスとともに、地域子育て支援センターの開設から充実に至るまでが、各市町村における保育に関わる大きな課題となっている。

「地域子育て支援センター事業」は、全国で1997年度までに428件、1998年度までに693件も実施されている。岐阜県では、1998年度までに20カ所の地域子育て支援センターが開設された。さらに1999年度は37カ所に及んでいる。

本論文では、岐阜県の「地域子育て支援センター事業」における「親子教室」の実施について取り上げ、考察する。

2. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

1998年度保母養成協議会（現保育士養成協議会）ブロック研究補助金により「地域子育て支援センター事業の実態と保母（保育士）養成校の課題」のグループ研究[(3)]を行った。この研究成果の一部である、岐阜県内の「地域子育て支援センター」に関する聞き取り調査に基づき、本論文では子育ての社会化と最

適化について提言したい。

（2）調査の方法

岐阜県では1995年度より地域子育て支援センターが開設・実施されている。

1995年度は岐阜県内の4カ所で、地域子育て支援センターが開設された。それ以来毎年度県内で新たに開設され、平成10年度には20施設にまで増加している。本調査では、1995年度より「地域子育て支援センター事業」に取り組み、これまでに実績を上げている地域子育て支援センター3カ所に依頼して、聞き取り調査を行った。これらのセンターは、いずれも保育所の施設内に開設されている。それらに加えて、1998年度から「地域子育て支援センター事業」に取り組みだした施設も1カ所対象として加えた。

全部で4カ所の地域子育て支援センターに2回ずつ出向いて、直接指導者と担当者（以下センター職員とする）に面接して、「親子教室」をはじめとする子育て支援の実施状況や現在抱えている課題、将来の展望について尋ねた。地域子育て支援センターの全体像については、前述のグループ研究で発表した通りである。

ここでは、地域子育て支援センター事業の一つである「親子教室」の実施に焦点を絞って調査の分析を行う。

調査の進行過程は以下のようである。

1998年10月から1999年3月：
第1回聞き取り調査（各地域子育て支援センター1時間程度）

1999年6月から7月：
第2回聞き取り調査（各地域子育て支援センター2時間程度）

3. 調査結果

（1）「親子教室」の全体像

各地域子育て支援センターを訪問して直接職員に質問して得た事柄を、比較しやすくするために一覧表にまとめてみよう。

表1は、各地域子育て支援センター職員との面接に基づいてまとめたものである。

それぞれの地域子育て支援センター職員が、地域の実情に合わせて、独自性を発揮しつつ「親子教室」を計画し、実行に移していることが各2回の聞き取り調査を行う中で十分理解できた。

表1①　「親子教室」全体像の比較

	A　地域子育て支援センター	B　地域子育て支援センター
名称	親子教室（カンガルー教室）	親子教室
ねらい	地域の子育て家庭を支援していくための活動の一つとして行う 子育ての楽しさ・喜びを共感し合える場所を設ける 子育ての仲間づくりを支援する 母親の身体的・心理的負担を軽減する 育児不安を解消する	子育て情報の提供 母子ともに社会性の育成の場 母親同士のコミュニケーションの場 実際に保育者が子どもと関わる姿を見つつ、育児の方法を学ぶ 保育のノウーハウの提供により、子供と遊ぶ楽しさを実感する 育児ストレスを抱えた母親のリフレッシュの場
コース	年間5コース（1999年度より実施、1998年度は年間3コース）	年間3コース（1999年度は応募者多数のため、1コース付加する予定）
回数	各コース6回	各コース6回
対象年齢	1～3歳の未就園児親子	1～2歳くらいの未就園児親子
定員	各コース15組 全75組	各コース15組程度
日時	週1回　水曜日 午前10時～11時30分	指定日　2週間に1回（A、Bコース） 毎週1回（コース） 午後1時15分～3時
場所	主に保育所ホール、園庭	園舎1階子育て支援センター専用教室
広報	子育て通信「A」 市の広報	地域モデル事業に関するお知らせ 市の広報
内容	ふれあい遊び 造形遊び リズム遊び 砂遊び 子育てトーク	手遊び、絵本の読み聞かせ リズム遊び、運動遊び おやつの時間の井戸端会議（子育てについての意見交換）

表1②

	C　地域子育て支援センター	D　地域子育て支援センター
名称	親子教室	子育てサロン、子育て学級
ねらい	子育てに関する情報提供 子供同士遊ぶ楽しさや子供と遊ぶ楽しさを 実感する場 母親同士の友達作りの場 育児ストレスを抱えた母親のリフレッシュの場 育児に関する悩みに関する相談の場 自主サークルへの発展	遊び場の提供 友達作り 子育ての仲間作り 多数の子どもとの遊びの体験 当園の保育の理解 育児の悩み解消
コース	年齢別3クラス同時進行（平成10年度、11年度も 参加希望者数に応じてクラス別にする）	なし
回数	全クラス16回（5月から3月の毎月第2、第4 土曜日）	子育てサロン：週1回 子育て学級：月1回
対象年齢	0～3歳児とその保護者	サロン：0～3歳児親子 学級：2歳児親子（次年度入所予定者）
定員	1998年度は0、1、2・3歳児の3クラスに分類 1999年度：0、1歳児、2、3歳児2クラスに分類	1998年度40名、1999年度27名
日時	午前10時～11時30分	サロン：午前10時～11時30分 学級：午前9時30分～11時30分
場所	保育園のホール、 現在保育園敷地内に支援センター建築中	支援センター室（図書室兼）81㎡
広報	通信、市の広報	広報、お知らせ
内容	保育内容5領域に関わる遊び 遠足 親子クッキング 運動会など	サロン：戸外遊び、リズム遊び、 その他季節に応じた遊びや作成 6月はみがき指導、7月七夕飾り 学　級：6月ふれあい遊び 7月救急救命講習会 8月水遊びと「夏の飲み物と栄養」 9月ミニ運動会

(2)「親子教室」の目的

「親子教室」開設の第1の目的として掲げられているのが、4地域子育て支援センターとも子育ての仲間づくりというようなことである。つまり、少子化、多様な生活環境によって子どもも大人も共に仲間を得ることが困難な状況であることがわかる。子どもよりむしろ親の方が、子育て仲間を求めているのであろう。

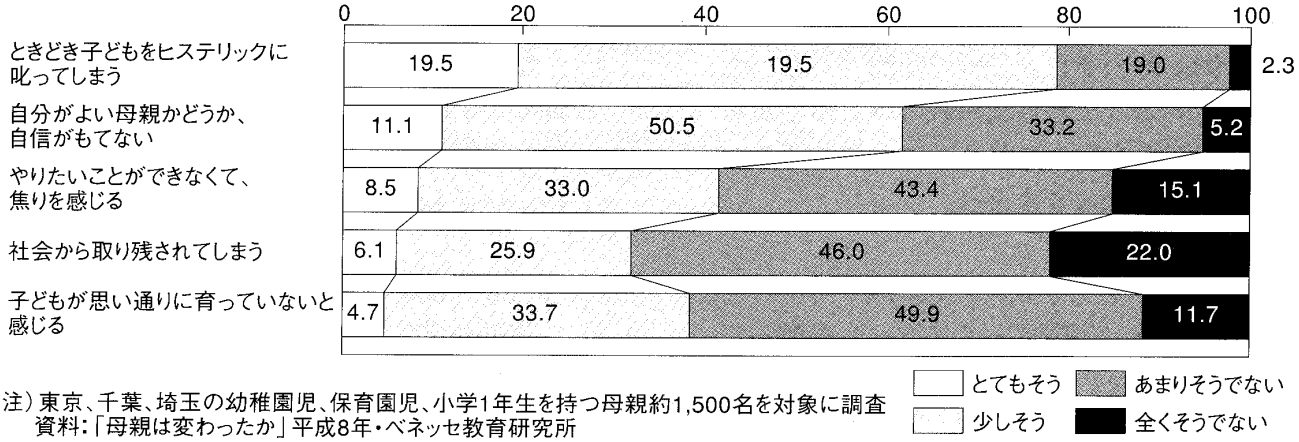
家庭内にいたのでは、なかなか同年齢の子を持つ親と出会うことができないが、地域で開催されている「親子教室」へ参加すれば、その集まりの中で友人を得る機会ができるという親の期待は大きい。

次に、親自身がわが子と遊ぶ楽しさを体得することも目的として挙げられる。現代の親は自分自身が子ども数の少ない家庭で育っている。だから、自分自身が親になるまで、乳児を抱いた経験すらないという場合が多い。ましてや、ことばによるコミュニケーションのままならない乳幼児と遊ぶという体験を持たずに親になった者にとっては、知識として数多くの子育てに関する情報を獲得していても、実際に子どもが満足するように遊んでやることが困難であるのが実状のようである。

さらに形式的には子どもと遊んでいても、そのことに生き甲斐を見いだせないでいる親の姿もみられる。子どもへの支援より、むしろ親への支援が必要な時代であることが理解できる。

また、図1からわかるように、「時々子どもをヒステリックに叱ってしまう」「自分がよい母親かどうか自信がもてない」母親が多くなっている。さらに表2で明らかなように、育児不安を強く抱えているのは専業主婦がもっとも多い(4)。専業主婦は、育児期には家庭に引きこもりがちになり、子育てのアドバイスを受けにくい状況にあることがうかがえる。だから、外出することにより母親のストレスの発散の場となることも「親子教室」は

図1　育児不安の有無



(注) 東京、千葉、埼玉の幼稚園児、保育園児、小学1年生を持つ母親約1,500名を対象に調査
資料:「母親は変わったか」平成8年・ベネッセ教育研究所

表2　母親の職業と育児不安の関係　(%)

		育児不安の程度		
		高不安	中不安	低不安
母親の職業	専業主婦	23.9	55.8	20.3
	フルタイム	12.6	54.4	33.0
	パートタイム	14.6	66.1	19.3
	自営業	15.3	57.7	27.0

(注1) 育児不安の欄の「高不安」「中不安」「低不安」は、育児に関して「時々子どもをヒステリックにしかってしまう」「子どもが思い通りに育っていない」などの5項目の回答結果を点数化し、育児不安の高さによって3群に分けている
(注2) 東京、千葉、埼玉の幼稚園児、保育園児、小学1年生を持つ母親約1,500人を対象に調査
資料:「母親は変わったか」平成8年・ベネッセ教育研究所

目ざしている。

(3)「親子教室」の実施方法

「親子教室」の開催回数は、地域の要求と地域子育て支援センターの許容により規定されている。1年間にわたり、定期的に一定の参加者により開催して、子どもの成長に合わせた内容を用意していくB,D両センターの方法は、家庭生活のリズム作りにも有効である。しかも1年間同一のメンバーで定期的に活動していくことで仲間づくりもしやすい環境となる。

一方、A,C地域子育て支援センターは、1年のうち2〜3ヶ月間を1コースとして1年間にいくつかのコースを開催する方法をとっている。より多くの親子が受講できる機会に恵まれることが大きなメリットである。この場合、受講修了後の仲間作りについては、参加親子の自主性に依拠するところが当然多くなる。したがって、受講期間に親の自主性と協調性を養うことも「親子教室」の役割として意識しておかねばなるまい。

それでは、実際に「親子教室」の活動では、親子の関わりの深化と子育て仲間づくりへの支援がどのように盛り込まれているのであろうか。A地域子育て支援センターのデイリープログラム例をみてみよう。

〈デイリープログラム例〉

9：45　受付（出席カードにシールを貼ってもらう）
　　好きな玩具で遊ぶ。
10：05　お片づけをする。
10：10　朝の会
　　お返事をする。
　　リズム遊びをする。
10：30　主活動
　　造形・集団遊び
　　講話・絵本づくり
　　子育てトーク
11：00　トイレを済ます。
　　手洗い・消毒をする。
　　おやつを食べる。
11：15　お話をみる。
　　人形劇・紙芝居
　　パネルシアター
11：30　おかえり

まず、センター到着後、それぞれの親子で遊んで過ごす15分間は、センターの指導者としては親子関係の状況をとらえるチャンスになる。また、親子にとってはこれから参加する「親子教室」への意識を高める時間でもある。回を重ねると、他の親子とコミュニケーションをもつ機会にもなる。

つぎに、主活動では造形・絵本づくりなどの親子による意図的な遊びのみならず、子育てトークのように育児に関する悩み・問題点・しつけの方法について情報交換する機会も設けられている。同年齢の子どもを持つ親同士が、一つの問題を共に考え、解決の糸口をみい出すことにより、共存の意識も高まるであろう。そしてその場で適切な助言のできるセンター職員という存在は、非常に重要な役割を担っていることになる。

このようにわずか1時間30分ほどの「親子教室」での活動により、親子関係に有効な遊びと子育て仲間づくりとが意識的に行われているのである。

(4)「親子教室」の内容

乳児を育てている毎日の生活の中で、わが子と向かい合ったときに「どのようにして遊んだらよいのだろうか」と悩む親の現実の姿が、子育て電話相談に関する先行研究[5]からも明らかになっている。

わが子と遊ぶためのカリキュラムを用意しなければ、遊びの発想も浮かばないのが現代の母親の育児状況である。このような場面にも、マニュアルを崇拝して育てられてきた親の姿がうかがわれるのである。

また、地域によっては同年齢の子どもを育てている家庭が近隣に見あたらないというところもある。少子化の加速と既婚女性の社会

参加の増大にともない、とくに都市部では公園で幼い子どもを遊ばせながら親同士が会話をしている様子を眺めることも少なくなってきている。

このように近所づきあいの希薄な環境だからこそ、家庭での親子の遊びをより豊かにする必要があろう。また、きょうだいも少ないので、子どもの遊び相手は親が努めなくてはならないのである。地域子育て支援センターにおける「親子教室」（又は同等の内容の事業）の大きな役割は、親子でふれあうための教材（材料）を呈示して、親子関係を築くよう支援することであろう。

それでは子育て支援センターでは、具体的にどのような親子あそびと子育て仲間づくりの提案をしているのだろうか。A，C2つの地域子育て支援センターの1998年度の実施例（表3、表5）と1999年度の計画例（表4，表6）を取り上げてみよう。ただし両センターの講座回数の違いは、地域性と参加希望者数なども関係しているので、本論文の検討事項には加えないこととする。

表5のように、C地域子育て支援センターでは1998年度の受講希望者が多かった。そのため各回毎のテーマによって、0・1・2歳、それぞれの年齢によるクラス分けを行う場合と、全受講者合同で開催する場合とに分類しているのが特徴である。

これら2つの地域子育て支援センターのテーマをみると、たしかにどちらのセンターにおいても、親子の家庭での関わりを深めるための遊び（リズム遊び、砂遊び、手遊び、七夕飾りなど）を提案している。また、子育てトークや遠足、運動会などのテーマを取り上げることにより、自然に他の親子との関わりを持つことのできる機会を設定している。こうして子育て仲間づくりの提案も行っているのである。さらに、既製品の玩具や絵本を用

表3　A子育て支援センター：1998年度実施例

1回	開講式 リズム遊び	親子でふれあえるリズム遊びを選択し、振り付けを工夫した。
2回	運動会ごっこ 砂遊び	外遊びの楽しさを知る。 砂遊びを体験する。
3回	絵本づくり 子育てトーク	「手づくり」の良さを知る。家庭での製作も含む。 子育てについての悩みを話し合いながら交流を深める。
4回	小麦粉粘土で 遊ぼう	
5回	講話 「子どもの生活リズム」	保健婦を講師として招き、子どもにとって望ましい生活リズムについて話していただく。
6回	絵本の見せ合い 閉講式	わが子のための宝物を発表し合う

・出席カードを用意――母親手作りのカードを持ち手にした。
・カードを持つことが子どもにとっては教室に通う励みになった。

表4　A地域子育て支援センター：1999年度（5～6月）コース計画例

1回	開講式 リズム遊び	自己紹介をしてお友達になりましょう。 親子で一緒にリズム体操や、手遊びをします。
2回	散歩に 行きましょう	こあらぐみさん（2歳児）と一緒に手をつないでいきましょう。草花を摘んだり、公園で遊びましょう。
3回	鬼ごっこ 子育てトーク	お母さんや友達と一緒に追いかけっこしましょう・ 育児の楽しさ・悩みなどフランクに話し合いましょう。
4回	小麦粉粘土で 遊ぼう	さらさら小麦粉が粘土に変身です。おだんごを作ったり、へびを作ったりして遊びましょう。
5回	絵本づくり 講話	親子教室の思い出に簡単な絵本を作ります。 保健婦さんのお話を聞きます。気軽に質問もしましょう。
6回	絵本の見せ合い 閉講式	完成した手作り絵本を見せ合いましょう。 修了証書をお渡しした後、記念撮影をします。

表5　C地域子育て支援センター：1998年度実施例（年間16回）

10年	ぴょんぴょんクラス	よちよちクラス	はいはいクラス
1回	劇団わんぱく組と共に（58）		
2回	粘土で遊ぼう（20）	リズムで遊ぼう（20）	手遊び楽しいな（14）
3回	七夕飾りを作ろう（15）	手遊び楽しいな（20）	リズムで遊ぼう（15）
4回	フリーマーケット（90）		
5回	どろんこ大好き（25）	粘土で遊ぼう（25）	絵本と一緒（15）
6回	遠足楽しいな、フォトコンテスト（35）		
7回	みんなでよーいどん（60）		
8回	リトミックを楽しもう（29）		
9回	ががや会議・主任児童委員さんを囲んで（12）		
10回	おもちつき（28）		
11回	大型おもちゃで遊ぼう（21）		
12回	サークル発表・劇団おひさま・手作り絵本（35）		
13回	先輩ママと語ろう（16）		
14回	フリーマーケット（80）		
15回	春みつけ遠足（17）		
16回	とんとんクッキング（20）		

※（　）内は参加者数

表6　C子育て支援センター1999年度計画例

4月	パンフレット配布とメンバー募集
5月	・はじめましてよろしくね——自己紹介と名札づくり
6月	・手遊び歌で遊ぼう
7月	・星に願いを 七夕飾りを作ろう
8月	・どろんこ大すき遊んじゃお 夏ならではのダイナミックな遊びに挑戦
9月	・丸めて破って遊んじゃお 日頃の育児ストレス発散・身近な材料を使って楽しもう
10月	・バスに乗って出かけよう 新しい発見がいっぱい。お楽しみに。
11月	・うんとこどっこい運動会 みんなで体をいっぱい使って楽しもう
12月	・親子でクッキング どんなケーキができるかな
1月	・お正月遊びを楽しもう オリジナル凧を作ってあげてみよう
2月	・お父さんも子育てに参加しよう
3月	春をみつけに「自然を使って遊ぼう」

いるのが当たり前の現代生活において、手作り絵本や七夕飾り作りなどで、親子の絆を強くするのによい題材を設定してある。

このように体験を重視することにより、子どものみならず親も新しい発見ができることであろう。たとえば、母親が苦労して完成した手作り絵本をわが子が大事に持ち歩きながら、他の子どもに自慢げに見せている。このような様子を見た親は、親としての充実感を持つであろう。さらに幼いわが子ではあっても、親の作品を喜び、敬意を表してくれる姿に対し、親としての喜びと自信を持つことができるはずである。

4.「親子教室」への提言

A地域子育て支援センター「親子教室」の参加者に対する調査によれば、5割（121名中57名）ほどの親が「親子教室」の応募理由として、「友達がほしいから」と記述している。一方、「親子教室」修了後は次のような感想を書いている。

「子育てが楽しくなりました」

「友達ができ、うれしく思いました」

「砂遊びがこんなに楽しいものだとは、知りませんでした」

どの感想からも「親子教室」の有効性がわかる。親たちの素朴な喜びや発見が、教室修了後も子育ての方法に生かされることを期待したい。

参加者の受講前後の考えを聞く限り、現在の「親子教室」は子育て支援の役割を十分果たしていることがわかる。

しかしながら、親たちがより自主性をもって育児に取り組むには、親自身の生き方や地域社会に対する意識に目を向けることができるよう、もう1歩発展的な「親子教室」の内容が必要であろう。

今後も地域子育て支援センターの増設と活動の充実が進められていくであろうが、センター職員の実践に関する情報交換も、もっと押し進められるべきである。そのためにはセンター職員の研修の機会を定期的に設けるべ

きである。そして研修の機会ができる限りどのセンター職員にも均等に行き渡るように配慮すべきである。

このような努力により、子育ての社会化が実現するはずである。

5. おわりに　　謝辞

従来の保育士の仕事は、保育所における保育の方法について熟練することを要してきた。また、支援の対象は常に保育所在籍の子どもに限られてきた。

しかし地域子育て支援センターとしての職員の仕事は、家庭における親と子どもの遊び方を支援することである。したがって支援の対象は、地域に住む乳幼児とその親ということになる。つまり、地域子育て支援センターの職員には家庭での親子の関わり方、遊び方について指導助言する力が要求されるのである。

4カ所の地域子育て支援センターにそれぞれ2回ずつ訪問し、職員の方々の丁寧で誠実な応対と、子育て支援について熱弁を振るわれる様子から、これからの子どもを取り巻く社会環境の好転に大いに希望を持った次第である。

勤務内容が従来の保育とは異なり、ひじょうにお忙しい中、数多くの資料提供と質問にご協力いただきました「地域子育て支援センター」職員の方々に、心よりお礼を申し上げます。

注

(1)　全国市立保育園連盟「保育所保育問題資料集　平成10年度版」87頁。

(2)　「厚生白書　1998年度版」239頁。

(3)　一盛久子、土方弘子、伊藤祐子、大村恵子、林陽子、古川よし子、神田直子、布施佐代子、石橋尚子、白幡久美子「地域子育て支援センター事業の実態とこれからの保育士養成に求められる課題；保育士養成研究」社団法人全国保育士養成協議会、17巻1999年、10頁。

(4)　白幡久美子「低年齢児保育の実態と展望」東海女子短期大学紀要、第25号1999年、98～99頁参照。

(5)　田仲昭夫「育児相談電話に寄せられた育児の悩みの内容分析；保育学研究」日本保育学会、第35巻第2号、1997年、102～109頁参照。
「アンヨはじょうず―平成10年度家庭教育子育て支援推進事業実施報告書―」岐阜県教育委員会生涯学習課、1999年3月、73～74頁参照。

参考文献

・幼児教育研究会編「最新保育資料集　1998年」ミネルヴァ書房
・山本理絵「地域子育てネットワークづくりに関する研究」愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）47号1998年、69～88頁。
・永冶次代「吹田市の公立保育園における子育て支援活動1；保育情報」保育研究所。Vol.270，1999年，8月号、2～6頁。
・永冶次代「吹田市の公立保育園における子育て支援活動2；保育情報」保育研究所、Vol.271，1999年，9月号、35～41頁。
・庄司順一「育児不安；保健の科学」杏林　出版、1998年、4月。
・中田照子「児童福祉法の改正と保育所の課題；ジェンダー研究」創刊号、1998年12月、2～15頁。

―児童教育学科　幼児教育―